

だいこく通信 第四十三号「秋の号」

「あいさつ

依然として新型コロナウイルス感染症が広がっています。
一日も早く事態がおさまることを祈るばかりです。

皆様におかれましても、こまめな手洗い、換気、人込みを避けるなど、ご自身と、そして、大切な人の身を守るための習慣をお続けいただき、くれぐれもご体調に気を付けてお過ごしくださいませ。

社報「だいこく通信」第四十三号をお届けします。

今回の内容は、当神社主催の催し物についてのご案内、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キヤラクターたちが活躍する連載などがなどです。

大國神社 宮司 大島資生

大國神社の今



○第六回だいこくクラシックスを延期いたしました。

当神社の秋の催しとして十月十八日（日）に開催を予定しておりました「だいこくクラシックス」ですが、コロナウイルス感染症の感染が拡大している状況に鑑み、やむなく延期することとしました。

ご出演予定の元東京都交響楽団ヴィオラ奏者の中山良夫さん、コンサートを楽しみにしてくださっていたみなさまに心よりお

詫び申し上げます。事態が落ち着いたところで、改めて計画したいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

お宮あれこれ～祝詞の話～

神社での祈祷や地鎮祭などの祭式の中で、ご神前で読み上げられるのが祝詞です。今回は祝詞についてお話しいたします。

祝詞は、神様にお参りするかたの祈願の趣旨をお伝えするためのものです。「かけまくも畏（かしこ）き」という冒頭のことばや、結びの「恐（かしこ）みかしこみも申す」ということばはおなじみのものでしょう。

祝詞はほかに「のりどごと」また「のつと」「のと」と呼ばれることもあります。

現存する最も古い祝詞は、平安中期の法典である「延喜式」卷八にある二七編と、藤原頼長の日記「台記」にある中臣寿詞（なかとみのよごと）一編だとされます。

次に、ことばの上からみた祝詞の特徴についてみていくましょう。

祝詞は「宣命書き」という独特の方法で書かれます。これは、名詞・動詞など実質的な意味を持つ語を漢字で記し、助詞・助動詞などは万葉仮名を使って行の右側に寄せて小さく添えるものです。次の写真は地鎮祭の祝詞の一部です。

此乃 神籬^ノ 招^{マツ}伎^{マツ} 奉^{マツ}里^{マツ} 坐^{マツ}世^{マツ} 奉^{マツ}留^{マツ} 挂^{マツ}介^{マツ} 麻久母^{マツコ} 畏^{マツ}伎^{マツ} 此乃 地^{マツ}乎^{マツ} 宇志^{マツ}波^{マツ}伎^{マツ} 坐^{マツ}須^{マツ} 大神等^{マツ}
神等^ノ 乃 大前^ノ 何某恐^{ハシメテ} 美^{ハシメテ} 恐^{ハシメテ}美^{ハシメテ} 母^{ハシメテ} 白左久^{ハシメテ} 今度^{ハシメテ}此乃 大地^ノ 某神社乃^{ハシメテ} 瑞^{ハシメテ}乃^{ハシメテ} 神殿造^{ハシメテ}
地^ノ 何某乃^{ハシメテ} 家居^{ハシメテ}乎^{ハシメテ} 建設^{ハシメテ}介^{ハシメテ} 卒^{ハシメテ} 登^{ハシメテ} 「古^{ハシメテ}伎^{マツ}」 例^{ハシメテ}乃^{ハシメテ} 隨^{ハシメテ} 忌^{ハシメテ}錄^{ハシメテ}以^{ハシメテ}知^{ハシメテ} 迷^{ハシメテ}荒草刈^{ハシメテ}払^{ハシメテ} 忌^{ハシメテ}鍬^{ハシメテ}
大宮地^ノ 登^{ハシメテ} (美志^{アリカ} 在^{ハシメテ}所^{ハシメテ}登^{ハシメテ}) 斎定^{ハシメテ}卒^{ハシメテ} 留賀^{ハシメテ} 故爾^{ハシメテ} 今日乃^{ハシメテ} 生日乃^{ハシメテ} 足日^{ハシメテ} 御食御酒種種^{ハシメテ}

たとえば最初の行の「此の地を」という部分では助詞の「の」を「乃」、「を」を「乎」でそれぞれ小さく書き表わしています。

祝詞の形式には宣命（せんみょう）体と奏上体との二種があります。宣命体は神意を神職が参列者にとりつぐもので、「と宣（の）る」ということばで結ばれます。奏上体は神職が神前に奉るもので、「…と申す」という結びのことばで終わります。現在用いられているものの多くは奏上体ですが、六月の「夏越の大祓」、十二月の「年越の大祓」で奏上される「大祓詞」では前者の宣命体が使われています。

祝詞の文章の大きな特徴として、次の二つが挙げられるでしょう。一つは、まず基本的には古典文法を用いていること、もう一つは和語を中心を使うという点です。この二つ目の特徴についてもう少しお話ししますと、実質的な語を基本的に和語、つまり大和言葉で表現するのが一般的です。たとえば、建築にかかる祭式の場合、「工事」は「たくみのわざ」、「関係者」は「かかづらへるもの」のように和語で読みます。

では、実際の祝詞の例を少しだけご紹介しましょう。

次に挙げるのは、日頃からわたくし子どもの大国神社に参拝している「小国大吉」という人が、室内安全を祈願する祈祷を受け、という場面を想定して作ったものです。

まず、例文をお示しします。実際にご神前で奏上する祝詞はもつと長くなりますが、今回は祝詞の構成がわかりやすいように重要な部分のみの簡略なものになっています。

掛けまくも畏き大国主大神の御前に恐み恐みも申さく常
日頃より蒙り奉る御恵みを嬉しみ奉り忝み奉る小国大吉

今し御前に参上り御饌御酒捧げ奉り拝み奉る状を平^{タマ}けく安
らけく聞こしめし給ひ此れの小国大吉の身をも家をも守り恵
み幸はへ給へと恐み恐みも申す

この祝詞は大きく分けると三つの部分から成り立っています。初めに「神様に呼びかける」部分、次に「神様に祈願の背景をお伝えする」部分、そして、「神様に祈願の内容をお伝えする」部分です。三つそれぞれについて内容を見ていきましょう。



【神様に呼びかける】

掛けまくも畏き大国主大神の御前に恐み恐みも申さく
(声をおかけすることも恐れ多い大国主の大神様に謹んで申し上げます)

祈願するにあたって、まず神様にお聞きいただくべく呼びかける部分です。先にも触れた通り、祝詞の冒頭部分は多くがこのような文言になつており、神様の名前は神社によつて、また祭式の種類によつて異なります。

【神様に祈願の背景をお伝えする】

常日頃より蒙り奉る御恵みを嬉しみ奉り忝み奉る小国大吉今しう前に参上り御饌御酒捧げ奉り拝み奉る状を平けく安らけく聞こしめし給ひ

(常日頃から大神様の恵みをありがたく頂戴しております小国大吉は今、ご神前に参上し、お供物をたてまつて大神様を拝んでおりますので)

この部分では、祈願をすることとなつた事情や背景をお伝えしています。普段から神様からさまざま恵みをいただいていることを述べ、感謝の意を表したうえで、今日はお供物を持参して参上しました、ということをお伝えしています。

【神様に祈願の内容をお伝えする】

此れの小国大吉の身をも家をも守り恵み幸はへ給へと恐み恐みも申す

(どうかこの小国大吉とその家をお守りくださいますよう、謹んでお願ひいたします)

ここで神様にお願いしたい内容を伝えます。



実際の祝詞ではさらに丁寧にするために装飾句を添えるなどします。祝詞では「嬉しみ奉り」「忝み奉る」、「守り恵み幸はへ給へ」のように一語でも済むところで、類似した意味を持つ語を二つ三つと重ねる表現がよく見られます。神様に対してより丁寧にお伝えするとともに、語調をよくするための表現技法であります。

祝詞は先に述べた通り、古い言い回しを使つたり、和語で読みかえたりする場合があり、ちょっとわかりにくく感じるところもあるかと思います。しかし、よく聞いていただくと、意外に内容がわかりやすく、驚かされることもあると思います。次に祝詞をお聞きになる機会がありましたら、よく耳を傾けてみてください。



祭礼・祈祷などのご案内

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは次の電話番号もしくはメールにてお願ひいたします。不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話ください。のちほどこちらからご連絡いたします。

○諸祈祷受け付けております。

商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、隨時祈祷を行なつております。祈祷日時については、お電話やメールにてご相談ください。

(連載まんが)

大吉うさぎ

～神社豆知識 その10～

くま こまち 作



〈お問い合わせ・お申し込み〉

電話

携帯

eメール

daikokujinja@gmail.com

○次回甲子祭

令和二年十一月十七日(火) 午前五時～正午

○開運千人講祈祷祭 每月一日 午前六時～正午まで

次号発行予定

「だいこく通信第四十三号」、いかがでしたか。次号「冬の号」は、令和二年十一月十七日の甲子祭に発行予定です。

「だいこく通信」第四十三号 令和二年九月十八日発行

編集・発行 大國神社社務所

〒170-10003 東京都豊島区駒込三一―十一

<http://www.daikokujinja.org>

